

“MY TOWN” うおっちゃん

# 歩 & 目 足 & ラテス

Vol.67

## 若者たちのアメリカ渡航熱と 大家住宅・八幡浜市向灘

岡崎 直司

タウンツーリズム講座主宰・  
ヘリテージマネージャー

西井久八壽像



明治から大正・昭和にかけて、八幡浜界隈からは、多くの若者たちがアメリカンドリームに魅せられて渡米した。まず、そうした海外雄飛の渡航熱もたらされたのは、西井久八という先にアメリカで成功した人物による所が大きい。彼は、明治11年、22歳の時にアメリカに出航、東南アジアからヨーロッパを経て半年かけてオレゴン州のポートランドに上陸。やがてシアトルにおいてスター洋食店や農場経営などで成功を取

め、同22年には一旦妻帯のために帰国し、その際に郷里の若者たちにアメリカの将来性を説いて回った。地域の外向的気質に火が付いたものか、以後盛んに渡航する者が後を絶たなかった。一方のアメリカにおいては、同40年代に入ると失業問題などで日本人排斥運動が起き、次第に日本からの渡航が困難になってゆく。そうした中でも、実際にアメリカでの成功話が多くあり、郷里への送金で豊かな生活への渴望感が醸成され、密航と言う手段での渡航がいよいよ計画されて行く。



経太郎が経営していたシアトルのレストラン



大家経太郎夫妻

日に出港し、69日間かけてサンディエゴに到着し、この時は直ぐに強制送還されている。しかし、翌大正2年には川之石港から再チャレンジし、今度はバンクーバーに漂着、アメリカ社会に紛れ漁民として成功を収めた後、彼の地で没している。川之石には、最初の太平洋横断を壮舉とし、渡米先覚という称号で彼の顕彰碑も建てられている。同年あい前後して、八幡浜の真網代からも天神丸という打瀬船が出港し、サンフランシスコの北に漂着。こうした破天荒な出来事は、昨今の地域の取り組みでも紹介され、「北針(コンパスのこと)」という名称が比較的知られるようになっていく。さて、ご紹介したい洋風建築の大家家が、西井の出身地でもある



新築時の大家家



現在の大家族

向灘の勘定地区に大正初め頃に建てられた。建て主の大家経太郎は、その西井の影響でまだ移民制限の無い時期に渡米し成功を収めた一人。やはりシアトルで二軒のレストランと農場を経営し、彷彿とさせる当時の写真がいくつか残されている。当たり前だが、向こうでの洋装の生活、慣れぬ言葉の壁、そうした生活習慣の違いなどを明治期の後半にあつてどう克服していったものか。きつと先達であつた西井久八の存在とアドバイスは、当地からの移民の人々には大きな安心感であつたのだろう。四国山の麓には、そうした恩恵を受けた人々によって西井の壽像が建てられている。

建物は、寄棟屋根、総二階建ての擬洋風建築で、縦長窓の風情は当時の住環境を思えばきつと異彩を放つていたことだろう。またこの家には面白い話が伝わっている。施工する際には、アメリカから取り寄せた樽に入ったセメントなるものが基礎工事に使われ、地元の大工は「果



屋根裏の和小屋、曲材の梁



一階洋間の引き戸



固い桜材のレール、100年の使用に耐えている

ドロしたものが固まるのか？」と半信半疑であつたとか。新しモノ好きの浜っ子であつても、時代はまだ大正の初め、コンクリートなど見たことが無かつたのである。県内での本格的コンクリート建築の嚆矢はやつと大正11年の萬翠荘。佐田岬灯台でも同7年である。例え木造建築の基礎工事でも、液状の物体を型枠に流し込むような施工体験は、きつと度肝を抜かれるくらいのものであつたに違いない。この家の地下には大きなコンクリートの地下室が設けられている。

かくしてアメリカ流儀の大家族は次第にその形を表してゆく。内部も少し変わつていて、一階の洋間は畳を敷いてゆくと、サイズが合わない。必ず余つた板間部分が生じ、大工泣かせだつただろうことが想像される。しかし、二階は全

たしてこんなドロ

くの和風仕上げで、日本間の続き座敷に欄間、床の間、開口部には肘掛け手摺りという具合。

屋根裏構造はきつとトラスだろうと想定して上がらせてもらったが、何と伝統小屋組みの和小屋だつた。しかも、あえて曲材を用いた大工の気分を想像してみると面白い。得体の知れないセメントの基礎からスタートし、次第に棟上げへと工程が進む内に、伝統工法による対抗意識が働いたものかどうか。何となくそう考えたくなる、新旧がぶつかり合う和洋折衷建築なのだつた。ダイナミックな進取の気性と、地方におけるまだまだ保守な気分、そうした時代の混沌も垣間見られる、貴重な建造物である。

参考図書

「密航漁夫・吉田亀三郎の生涯」小島敦夫著、  
「アメリカの風が吹いた村」村川庸子著